

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(58)

古写真「合同庁舎と市立図書館」



目次

○古写真・絵葉書にみる土浦(58)	1
○博物館からのお知らせ	1
○家臣の奮戦を認める(中世)	2
○土屋家歴代当主の墓所(近世)	3
○中国古代の人物を描く(近世)	4
○江戸時代の日記にみる蓮根(近世)	5
○町立図書館ポスター(近代)	6
○市史編さんだより	7
○霞短信「赴任の御挨拶」	8
○コラム(58)	8
○情報ライブラリー更新状況	8

正面の建物は、昭和 42 (1967) 年に撮影された茨城県の合同庁舎(現在の常陽銀行土浦支店敷地内)です。元々は土浦城址内にあった新治郡役所の建物で、昭和 7 (1932) 年に曳家移築^{ひきや}されました。左手奥の 2 階建ては、市立図書館です。元霞ヶ浦海軍航空隊下士官集会所で、図書館は昭和 6 年に町役場 2 階から移転しました。昭和 44 年には陸軍憲兵分隊官舎跡(現在の当館の位置)へ、同 48 年には文京町へ、平成 29 (2017) 年にアルカス土浦内へ移転しました。

【情報ライブラリー検索キーワード「役所」】

博物館からのお知らせ

★★土浦ミュージアムセミナー★★

土浦で育まれた歴史や文化について、土浦市立博物館及び上高津貝塚ふるさと歴史の広場の学芸員が日頃の研究成果を発表する連続講座です。

- | | | |
|-------|---------------|---------------------|
| 第 1 回 | 6 月 1 5 日 (土) | 「土浦市の終末期古墳について」 |
| 第 2 回 | 6 月 2 2 日 (土) | 「菊田禎一郎と土浦市の誕生」 |
| 第 3 回 | 6 月 2 9 日 (土) | 「縄文時代の製塩土器の出現について」 |
| 第 4 回 | 7 月 6 日 (土) | 「信太郡衙を探る」 |
| 第 5 回 | 7 月 1 3 日 (土) | 「茨城県内における中世五輪塔について」 |



時 間	各回午前 10 時~11 時 30 分	受講料	各回 50 円 (資料コピー代)
会 場	博物館視聴覚ホール	申 込	博物館へ電話
定 員	各回 30 人 (事前申込制)		TEL : 029-824-2928

★★展示解説動画をご覧ください★★

2~6 ページ下部の QR コードから、特設サイトにアクセスして各解説を視聴できます。博物館内では、Ibaraki FREE Wi-Fi が利用できますので、ぜひご見学の際に合わせてご活用ください。

家臣の奮戦を認める

おだてんあんかんじょう
—小田天庵感状—

鎌倉時代末期から江戸時代初頭にかけて、戦で家臣が戦功をあげると、主君がその功績を褒めたたえて文書を与えることがありました。このような文書を「感状」といいます。今回紹介する資料は、小田天庵（小田氏 15 代当主^{うじはる}氏治）が家臣^{おかのえちぜんのかみ}の小神野越前守へ与えた感状です。

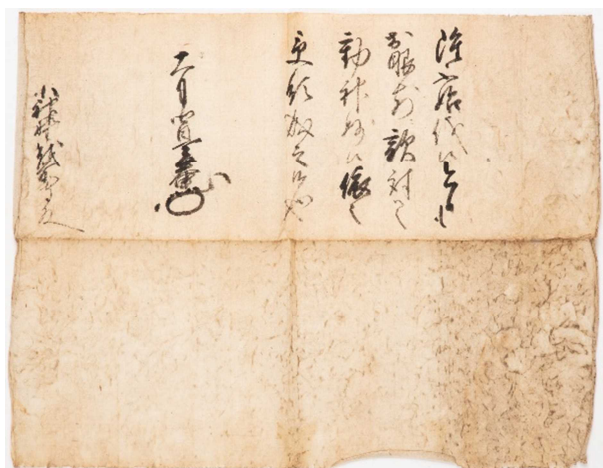
感状の様式から見ていきましょう。文字が書かれているのは、本紙の上半分です。これは本紙を横半分に折り、その状態で文書を認めたことによります。このような様式は「折紙」と呼ばれる、略式の書状です。

差出と宛名も確認します。差出人は日付の下（日下）に「天庵」と名を書き、花押（サイン）を据えています。宛名の「小神野越前守」は本紙の一番左に、日付よりも下げて記されています。また、差出と宛名の間も余白が大きく取られています。このような宛名の書き方は、身分が下の者へ宛てる際に使われる書き方です。また、本資料では敬称は「殿」と漢字で記されていますが、さらに目下の者^{めした}へ宛てる場合には、「とのへ」と平仮名で書かれることもあります。

本文には「今日も於眼前二敵討候之動神妙候」とあり、主君の目の前で敵を打ち取ったことは神妙である（感心した）と記されています。また、「依之受領成之候也」とあることから、小神野氏へ越前守の受領名を与えたと考えられます。

それでは、小神野氏が奮戦した戦は、いつ起きたのでしょうか。本資料には年代が記されておらず、いつ発生した戦と断言することはできません。ただし、本資料が作成されたおおよその時期を推定することはできます。氏治が用いた花押は4種類確認されており、用いた時期によって形が異なります（黒田基樹「常陸小田氏治の基礎的研究—発給文書の検討を中心として—」『国史学』166、1998年）。本資料の花押は、天正10（1582）年から同18年にかけて使われたものと一致するため、この時期に作成されたと考えられます。

（西口正隆）



小田天庵感状（個人所蔵）

雖不始儀候、今日も
於眼前二敵討候之
動神妙候、依之
受領成之候也

十一月四日 天庵（花押）

小神野越前守殿



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも中世コーナーに展示しています。
●小田氏治判物（当館所蔵）
●小田天庵記（当館所蔵）



土屋家歴代当主の墓所

—土屋家累代墓所配置図—

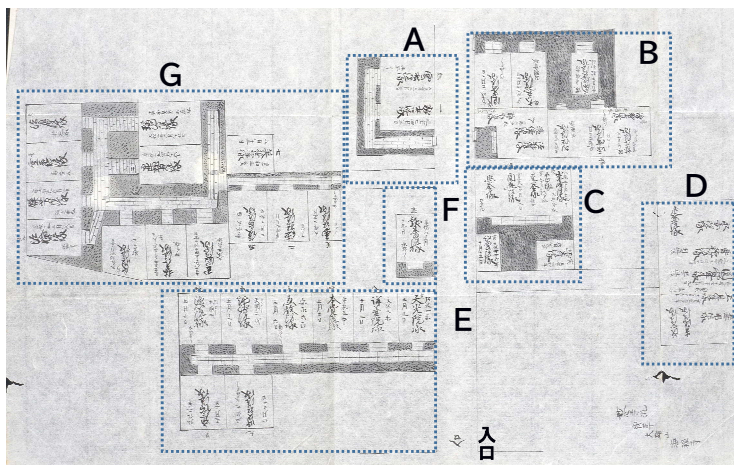
現在、土浦藩土屋家の菩提所は神龍寺（市内文京町）です。しかし、近世においては、土浦藩土屋家の歴代墓所は海禅寺（台東区松が谷）にありました。

それでは、当時の土屋家の歴代墓所はどのような姿をしていたのでしょうか。江戸時代後期に描かれたと推定される「土屋家累代墓所配置図」（以下、配置図）を見てみましょう。配置図の中で最も新しいのは、天保14（1843）年10月15日に亡くなった紅雲院（柳子・10代当主寅直二女）の墓です。したがって配置図はこの年以降に作成されたと考えられます。

墓所は大きく分けて7つのエリアに分かれていました。墓所の最も奥にあるのが、融相院（初代当主数直）と雲松院（水野忠貞女・数直室）の墓（A）です。その右側には精徳院（水野藤三郎・数直二男）や大慈院（定直・2代当主政直二男）らの墓（B）があります。Bの下には圓應院（松平康信女・政直室）や崇峰院（昭直・政直長男）らの墓（C）、Cの右側には圓覚院（忠直・数直父）らの墓（D）が配されています。入口に戻り、左側には祥善院（8代当主寛直）や本覚院（4代当主篤直）らの墓（E）が、Eの上には献寿院（水野忠周女・3代当主陳直室）の墓（F）が、Fの左側には徳相院（政直）や霊鷲院（陳直）らの墓（G）が配されています。

では、これらの墓はどのような順序で参拝されたのでしょうか。「浅草海禅寺寺中御名牌有之図」という史料には、次の順に参拝することが図示されています。まずAにある融相院・雲松院の墓に手を合わせ、次にGの徳相院・霊鷲院・秋光院（政直側室・陳直生母）・法輪院（水野忠周女・陳直継室）・玉温院（陳直息）・空花（華）院（篤直女）、Bの大慈院、同じくBの蘭馨院（陳直長女）・涼岸院（六條有和女・政直継室）・林光院（政直女）、Bの精徳院、Cの圓應院・崇峰院・不白（政直息）、Dの圓覚院、最後にFにある献寿院の墓を参拝すると記されています。この参拝順にはEは言及されていません。Eのエリアで最も古いのは安永5（1776）年5月20日に亡くなった本覚院であることから、参拝順はそれ以前のものと考えられます。したがって当時は、A→G→B→C→D→Fの順に参拝していたと考えられます。

Eのエリアに墓が立ち始めて以降の参拝順は判然としませんが、土浦藩土屋家の祖である融相院と、その妻雲松院に手を合わせたのち、歴代の当主への拝礼を行ったと考えられます。



土屋家累代墓所配置図（個人所蔵）

（西口正隆）

※ゴシックの文字および点線は筆者加筆



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近世コーナーに展示しています。

- 浅草海禅寺寺中御名牌有之図（当館所蔵）
- 土屋家略譜（個人所蔵）



中国古代の人物を描く

わかべとうすい しゅばいしんのす
—岡部洞水「朱買臣図」—

写真中央の人物に注目してみましょう。薪^{たきぎ}を担いで歩きながら何か書物を読んでいるようです。

掛軸^{はしうら}の端裏に「朱買臣図」と画題が書かれていました。朱買臣（？～紀元前115）は実在の人物で、中国前漢時代、蘇州^{そしゅう}（中国江蘇省）に生まれました。『画題辞典』には「朱買臣」の項目があり、「薪を売って生活するほど貧しかったが、学問を好んで続けた。仕官を望んだが50歳になってもかなわず、妻はそれを嘆いた。武帝の時に試験に合格し、会稽^{かいけい}（中国浙江省）で長官に任ぜられた」と紹介されています（斎藤隆三著 昭和63年 国書刊行会）。「朱買臣図」は大器晩成や立身出世のたとえとして好んで描かれた画題のようです。

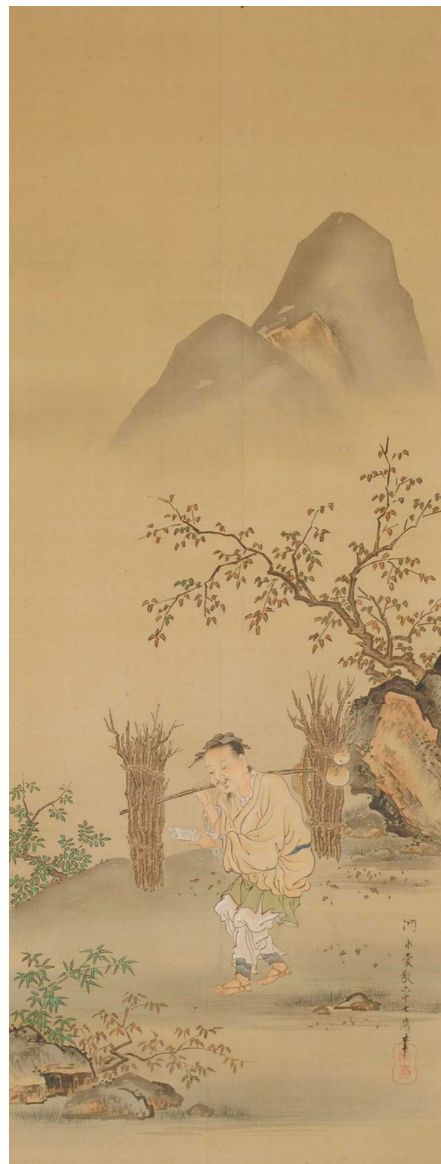
写真右下には落款^{とうすいあいけい}「洞水愛敬六十七歳筆」、捺印^{たんおう}「淡翁」があり、土浦藩土屋家に絵師として仕えた岡部洞水（1780頃～1850）が67歳の時に描きました。洞水は表絵師筆頭家である駿河台狩野家の洞白^{とうはく}（1772～1821）に学んで「洞水」の名乗りを許されたといわれています。

「展示室だより 霞」ではたびたび洞水を取り上げてきました。トンボ釣りをして遊ぶ子どもたちを描いた「唐子図^{からこず}」では、昆虫の描写に特段の筆の冴えを見せるのではないかと解釈をくわえ（霞1号）、江戸での朝顔ブームの発端となる手引き書にも挿絵を描いて関わっていたことを紹介してきました（同8号）。

徳川家光の守役を務めた、酒井忠世^{ただよ}（1572～1636）、土井利勝^{としかつ}（1573～1644）、青山忠俊^{ただとし}（1578～1643）の姿を描いた「大猷公之三傳図」は幕府の忠臣に仮託し、洞水が土浦藩主に対する忠誠心を込めて描いたと推定しました（同巻50号）。同様に「朱買臣図」は学芸に励んで出世を望む侍にとっても、そのような侍が輩出することを期待する藩主にとってもあつらえむきの画題だったと思われます。

洞水の作品は細やかな描写が特徴です。「朱買臣図」においては薪の乾燥した質感や、手に持つ書物のしなやかさにこだわりが見えるようです。貧しくとも好きな学問に打ち込み、新たな知見を得る喜びを感じているのでしょうか、朱買臣の頬はほんのり赤く染められています。

（木塚久仁子）



岡部洞水「朱買臣図」
（江戸時代 当館所蔵）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近世コーナーに展示しています。
●岡部洞水画「諸葛孔明図」（当館所蔵）
●岡部洞水画「農耕図」（個人所蔵）



江戸時代の日記にみる^{れんこん}蓮根

—堀に繁茂した蓮と、植えられた蓮—

「れんこんの生産量、日本一」のまち、土浦。霞ヶ浦湖岸を取りまき一面に広がる^{はすだ}蓮田は、土浦を代表する景観になっています。現在のような広大な蓮田景観が形成されていったのは1970年代以降、国の減反政策の影響を受けて、稲作を行っていた水田が蓮田に切り替えられていったことによるものです。

では、江戸時代の土浦ではどのような風景が見られたのでしょうか。ここでは、江戸時代後期の国学者色川^{いろかわ}三^{みな}中^{なか}（1801～55）の日記から、当時の蓮根に関する記事を見ていきましょう。三^{みな}中^{なか}が認めた日記「家事志」の文政10(1827)年10月7日の条に、次のような記載があります。

夕方、木原行蔵より大藕根一ツ被^き遣^{はら}申^{こうぞう}候^{ぐん}、長サ六尺わたり二寸はかり、わつかみふし余^{あまり}なり、是^{これ}則^{すなわちこのころ}此頃外堀ニ出来候品也、此両三年水ニて自然と根を寄しニや、蓮根外西町うらニハえ、当年^{はなはだ}甚^{はなはだ}はひこり、堀一面二みち^{ことごとく}悉^{かく}蓮池となる、斯^{しか}まで早く繁るものとハきゝても思ひハせさりしに

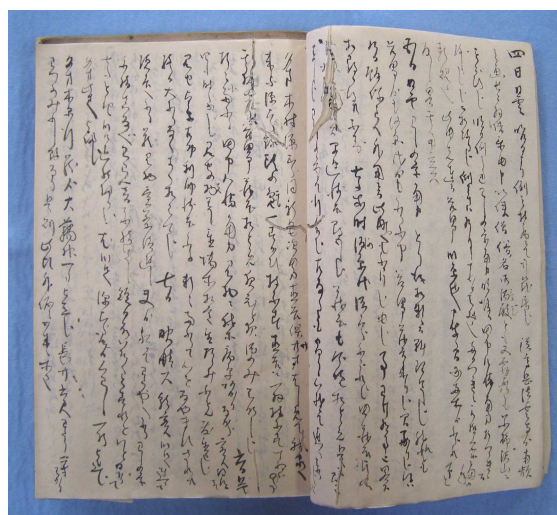
大きな藕根（蓮根のこと）を三^{みな}中^{なか}に贈った木原行蔵は土浦藩士で、藩校郁文館の前身である「読書所」に勤めた人物です。後に郁文館の教授となる木原老谷^{ろうこく}の父にあたります。行蔵と三^{みな}中^{なか}とは同年輩で、書物の貸借などを通して日頃から懇意にしていました。この日の夕刻、行蔵からもらった蓮根は、長さが1.8m、直径6cmほど、節はわずかに3つしかないものでした。贈られた蓮根は土浦城の外堀で採れたもので、ここ3年のあいだに自然と根をおろしたものでした。土浦城の東側、武家屋敷のある外西町の堀に生え、この年には堀一面に繁茂して「蓮池」のような景観になっていました。短い期間に生い茂ってしまうことは聞いていたが（このようになるとは）思わなかったと、三^{みな}中^{なか}は書き留めています。ここに記されているのは、堀の中に自然に繁茂した蓮根ですので、栽培をしていたわけではありません。

薬種業・醤油醸造業を営んだ色川家ですが、城下町の周辺には複数の田畑をもっていたことから、「家事志」の中には農作業に関する記事も散見されます。このうち、天保4（1833）年5月上旬の田植えに関する

記事のなかに、「山口の田ハ春返し申候まゝ蓮田計也」（5月2日の条）との一文が見えます。詳細は不明ですが、この年の春にそれまで耕作していた水田が、そのまま放置されたため、蓮田になってしまった状況を記したように思われます。こちらにも蓮が自然に繁茂した結果と想像されます。

これに対して、同じ天保4年の8月19日の日記には、「両三日中より権八うら蓮うゑ（植え）候田かり下男久蔵川口へ手伝せ申候」との記載がみられます。こちらは、蓮根を植えた田で久蔵に収穫を手伝わせたと記していますから、栽培がおこなわれていたことを示唆します。土浦城下周辺でも僅かながら蓮根の栽培がみられたようです。

（萩谷良太）



「家事志」式

（色川三中日記、茨城県指定文化財 当館所蔵）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 「墨僊漫筆之稿」（個人所蔵）（近世コーナーに展示）
- 蓮根掘り用鋤・蓮掘り万能（当館所蔵）（近代コーナーに展示）



町立図書館ポスター

—開館初期の利用状況—

「博物館だより 霞」番外第1号で当館が陸軍憲兵分隊の官舎跡に建っていること、建物は戦後市立幼稚園や市立図書館、さらに郷土資料館として活用されたことを紹介しました。今回は今年開館百周年を迎える市立図書館に注目してみたいと思います。

明治32（1899）年の図書館令の発布により、地方自治体は図書館を設置できるようになりました。土浦では、大正13（1924）年4月1日に町役場（現中央二丁目、筑波銀行本店敷地内）の2階に町立図書館を開設しています。『土浦町条規』の「土浦町立図書館規則」によれば、同年1月に行われた皇太子殿下結婚の大礼を記念したもので、「学芸ニ関スル図書新聞雑誌ヲ収集シ広く公衆ノ閲覧ニ供シ一般社会ノ知識啓発ニ増補スルヲ以テ目的」としています。とはいえ、「十二歳未満ノ児童ニハ図書閲覧ヲ許サズ」とあり、現在の市立図書館とは異なり利用に制限がありました。

写真の「智識は最善の武器」「町立土浦図書館」と示されたポスターは、市立図書館から近年当館へ移管された資料です。右上には、積み重ねた図書の上に、知恵の象徴であるフクロウが、左上には満月を背景にインク壺に入った羽根ペンと図書がデザインされています。読書の秋にちなんで作成されたものでしょうか。下半分には、大正13年から昭和3年までの閲覧者数や閲覧図書の内訳などのグラフが手書きで表されています。

大正13年に注目すると、土浦町の人口15,038人に対し閲覧者は1,709人（内1,100人程度が学生・生徒）、閲覧図書で最も多いのは文学書で600冊程度、蔵書数は2,286冊といった情報が読み取れます。「各月閲覧人」の折れ線グラフは、大正13年6月は25人、1月3人、10～20人程度で推移しており、1日あたりの閲覧平均人数と思われます。折れ線グラフは、昭和5（1930）年9月まで記されています。この年10月、町立図書館は霞ヶ浦海軍航空隊の元下士官集会所（現中央二丁目 常陽銀行土浦支店の敷地の一部）に移転しました。グラフは移転前までの利用状況をまとめたもののようです。「いはらき」新聞（昭和6年12月24日付）記事は、1月から11月末までの購入図書は456冊で、創立当初の約2倍半の総計2,500冊の図書を備え付けたが、図書館としての要求を満たすにはまだ程遠い、としています。グラフと新聞記事では蔵書数の情報に齟齬がみられますが、いずれにせよ、蔵書を充実させ、閲覧者数を増やすことが命題であったといえるでしょう。なお、本資料は傷みが激しかったため、解体して裏打ちを施し、額に入れて展示できるようにしました。（野田礼子）



町立図書館ポスター（修理前）
昭和6年頃（当館所蔵）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近代コーナーに展示しています。

- 土浦町役場（写真パネル） 大正時代
『むかしの写真・土浦』より
- 土浦町立図書館（写真パネル） 昭和30年代
土浦市立図書館所蔵



市史編さんだより

『片葉雑記補遺—色川三中の黒船情報—』発刊によせて

令和6年3月に『片葉雑記補遺』が刊行されました。今回はその内容の一部を紹介します。

昭和61（1986）年に刊行された中井信彦著『片葉雑記—色川三中黒船風聞日記』は、6冊あったと考えられる「片葉雑記」（色川三中が執筆）のうち4冊分のみを翻刻・解説した著書でした（「博物館だより 霞」番外第18号）。その当時は2冊が未発見の状況でしたが、その後平成29（2017）年に残りの2冊（一巻・四巻）が発見されました。今回発刊した『片葉雑記補遺』は、新発見の「片葉雑記」2冊と、執筆者である三中が参考資料とした大久保一学の「みちの記」、相馬某が執筆したと思われる「江戸湾防備態勢視察記録」の合計4冊と、中井氏が翻刻した4冊分の内容を補完する記述がある「野中廼清水」（三中執筆）からの抜粋を1冊にまとめました。

「黒船」とも言われるアメリカ使節のペリーが来航したのは、1回目が嘉永6（1853）年6月3日、2回目が嘉永7年1月16日です。三中が黒船来航関係の情報をまとめた「片葉雑記」は、嘉永6年6月から安政2（1855）年5月までのものです（一～六巻）。土浦で醤油醸造業を営み、国学研究にも熱心だった三中にもたらされた情報はどのようなものだったのでしょうか。江戸湾の防衛分担、ペリーとの交渉の様子、水戸藩の動向など政治的な情報だけでなく、江戸などの人々の様子も現地を訪れた知人からの書状などで三中のもとに集まってきました。

本書は、日本近代史の研究者である宮地正人氏の監修を受け、詳細な注記を付けていただきました。幕府から出された触書などの政治的な側面だけでなく、女髪結いや芝居興行の中止など当時の人々の生活や世情不安などについても注記によってその背景を知ることができます。

具体的にみてみましょう。ペリーが再来航した後の嘉永7年2月25日条に、三中は「世之中」というタイトルを付けて次のように記述しています。

「此節江戸のけはひ、芝居ハ巷丁目先日はじめ候へとも、見学なくて自らやめ候と申候」（本書68頁）

江戸で始まった芝居興行は客入りが悪く自主的に止めてしまった、というのです。この記述に対して宮地氏は注記で説明を加えています。その内容を要約すると、

嘉永7年1月11日に中村座で始まった「松銀杏鶴亀曾我」の上演は、ペリーの再来航という大事件によって観客が5～8人になり、出演者の病気を理由にして休みにになりました。さらに中村座さえ客入りが悪いのなら、と河原崎座でも13日からの興行予定を見合わせました。

しかし江戸町奉行から河原崎座に対して世情不安の助長が心配されることから興行を開始するように申し渡しが出ます。同じく興行を見合わせていた猿若町二丁目（現台東区）の市村座は、不景気で興行主になる人もいないと町奉行所に申し立てますが、町奉行所は周辺の茶屋などが出資して早く興行を開始するように申し渡すのです。

この注記を読むと、ペリー再来航による不安から芝居興行を楽しむ気分にならない江戸の人々の心情も、世情不安を助長させたくない幕府の思惑も知ることができます。

三中の日記形式の記述と、宮地氏の丁寧な注記に導かれて、黒船来航当時の時代の様子を感じていただけたら幸いです。

（市史編さん係 江島万利子）



1冊 3000円で販売中です

霞 短信

Kasumi-tansin

このコーナーでは、博物館活動にかかわる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、本年4月1日付で土浦市立博物館学芸員となった2名の職員のうち、井上学芸員が抱負を語ります。

赴任の御挨拶

みなさん、はじめまして。この4月から学芸員として博物館に勤務しております、井上翼です。今回は、この場をお借りして、簡単な自己紹介と土浦との関わり、そして学芸員としての抱負を述べたいと思います。

私は、千葉県の木更津市出身で、同市や隣接する袖ヶ浦市で育ち、大学時代は幕末の筑前福岡藩黒田家について研究しておりました。このように、県外の出身であり、学生時代も他の地域について勉強していた私は、これまで土浦と特別な深い縁はありませんでした。しかし、大学2年の春に初めて土浦を訪れてから、この街に特別な思いを抱くようになりました。初めての訪問では、博物館が当時開催していた、四館共同企画展「幕末動乱—開国から攘夷へ—」を観覧したり、土浦が誇る江戸時代の町人学者・色川三中を研究していた茨城県出身の先輩の案内のもと、中城通りや亀城公園周辺を散策し、かつて宿場町や城下町として栄えた街の空気に触れる機会となりました。

歴史を学ぼうとするとき、どうしても机に向かって資料を読むことが多くなってしまいます。過去の文献にあたることは歴史学の基本であり、とても大切な作業です。しかし、それだけではなく、実際に外に出て土地をめぐることの大切さ、楽しさを私に教えてくれたのが、歴史豊かな土浦という街だったのです。

最後に、学芸員としての抱負を述べます。ご縁あって、現在は土浦を訪れる側から、土浦にお迎えする側へと立場が大きく変わりました。これからは、市内の方にはもちろん、市外の方にも土浦ならではの歴史的魅力をお伝えすることで、かつての私のように、一人でも多くの方に土浦は特別な街だと感じていただけるよう、研究活動や教育普及活動に日々精進して参りたいと思います。まだまだ未熟者ですが、何とぞよろしくお願いいたします。

(当館学芸員 井上翼)

コラム (58) 再開館後、初めての総合展示です

土浦市立博物館は、空調設備等の大規模改修工事のため、およそ1年半にわたり休館しておりましたが、本年1月6日に再開館いたしました。再開館記念として特別展「土浦のたからもの一守り伝える、未来へ」(1月6日～3月17日)を、続いて上高津貝塚ふるさと歴史の広場との合同展「土浦“モノ”語り」(3月23日～5月12日)を開催し、1万5千人を超えるお客様をお迎えすることができました。

そして、今期からは「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」をテーマとする総合展示が再スタートしました。これまでと同様に、展示品を季節ごとに入れ替えながら、土浦の歴史と文化をご紹介します。

一般的な地域博物館の「常設展示」は、固定されたイメージがあり、いつも同じ展示品が並んでいる部屋であるとの先入観をもたれがちです。当館の総合展示では、春・夏・秋・冬と展示資料を入れ替え、また年に1度は総合展示を特別展に変更することにより、来館者の皆様に新たな資料との出会いの場を提供できるよう心掛けています。再出発した博物館にぜひお立ち寄りください。

(萩谷良太)

情報ライブラリー更新状況

【2024・5・18 現在の登録数】

古写真 602点(+0)

絵葉書 514点(+0)

※()内は2022年5月14日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは、画像資料・歴史情報を随時追加・更新しております。1ページで紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2024年度

春季展示室だより(通巻第58号)

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/dir000378.html>

1～6ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2024年度春季展示は、2024年5月18日(土)～6月30日(日)となります。「霞」2024年度夏季展示室だより(通巻第59号)は2024年7月2日(火)発行予定です。次回の来館もお待ちしております。